

看護学とあるべき看護学教育についての私見

三重大学大学院 医学系研究科 看護学専攻長 畑 下 博 世

2016年4月、三重大学では大学院医学系研究科に博士後期課程（看護学）が開設され、学部、博士前期・後期課程の一貫した看護学教育が可能となった。看護学専攻に所属する教員は、看護学の発展を目指し、今まで以上に教育・研究に取り組んでいくことが求められている。一方、平成29年4月現在、日本の看護系大学は241校、看護系大学院は117校を数えるまでになり、今なお新設が続いている。高度な看護学教育を受けることが可能な定員数は増加し続け、必要となる教員数の増加も著しい。この躍進する看護学分野において、一貫した教育体制を発展させることに課題は多い。以下は、看護学と看護学教育の課題と期待についての私見である。

I. 学問としての看護

看護学は実践の科学であると言われている。なぜなら、看護実践の中から疑問や課題を見出し、それを研究により明らかにして理論を導き、その理論を生かして看護実践を行うという循環しながら発展する関係が不可欠だからである。看護実践の積み重ねは重要であり、看護現場にはたくさんの埋もれているノウハウや知識がある。

近代看護確立の功労者であるナイチンゲールは、善意や思いつきではなく、科学的根拠をもって実践することが看護であると説明し、「看護覚え書」（1859）において、何が看護であり、何が看護ではないのかを明確に示した。

その後、ナイチンゲールの思想に基づく看護教育を受けた看護職者の中から、次々に看護の理論家が生まれた。ヘンダーソンは生理学を基礎に、人間の欲求が人間の健康に深く関連するというを前提として、14項目からなる看護の構成要素を示し、病をかかえる人々が、それらのニーズを自立的に満たすための体力・知力・意志力を持てるよう援助することを理論化した（1960）。他にも、多くの看護理論が生まれ、それらの理論をもとに看護の対象者を捉え、健康課題を見出し、援助し、評価することを繰り返している。

現在多くの看護系大学が設立されているものの、看

護学の学問的歴史は浅く、学問としての熟成は十分であるとは言えない。その一因として考えられるのは、看護学にはまず実践が求められるという特性があることである。命題に対する議論をあらゆる方向から考え、納得いくまで深めた上で、援助として対象者に看護を届けることが第一義となる。そのため、実験による検証を行うよりも、対象者への看護による成果を出すことが優先されてきた。また、看護は人間の反応を診断して援助するものであるため、科学的に厳密な実験を行うことも難しい。やはり、看護は実践の科学であり、これからも看護の対象者の傍らにありながら学問としての深まりを目指していくことになる。つまり、あらゆる看護の実践家が、同時に研究者でもあるべきであると言える。

II. 学部における看護学教育の課題と期待

看護基礎教育において、4年間という限られた時間の中で、あらゆる看護現象に対応可能な知識・技術を修得させることは極めて難しい。さらに、医療は日々進歩しており、看護者に必要な知識は増加し、求められる看護能力も拡大するばかりである。そこで、看護を学ぶ学生には精選された内容を基礎力として身につけさせ、足りない部分を自己学習できるようにする教育が求められる。

看護は多様な患者個々に応じて実践される行為であり、単に知識を獲得したり、1つの技術を覚え込んだり、機械的に反復すればよいというものではない。国家試験合格のためだけに教科書を暗記させたり、ある技術を“うまくできるように”練習させたりするのはなく、看護場面において看護の基本を押さえた上で、対象者に合わせて適用する力をつけられるよう学ばせなければならない。田島は、「看護行為は人と人とのかわり合いで成り立っている」としている（2002）。さらに、「看護教育の目標を具体化するには、看護を構成する教授—学修内容を、実践場面を想定して考えることが前提となる。そのためには、当面の課題に向かって実施する行為が、クライアント・患者と看護職者の関係で成り立つ過程を想定し、その実践過程と学修過

程に必要な内容を分析した上で教授—学修内容を精選し、目標化する必要がある」と述べている(1989)。つまり、看護学が実践を前提にした科学であることを学生に意識づけ、看護のための imagination の力を育てるような教育内容を設定することが重要となる。看護行為の原理・原則、その根拠、患者の問題解決のためにどのように応用するかを知識として学ばせ、基本動作の1つひとつを修得しつつそれらを連続的に滑らかに実施できるようにし、なおかつ看護行為を行う際の患者の思いを想像し、関係をいかに築くかをも考えさせるような学習を可能とする教育内容である。

しかし、教育年限の中ですべてを網羅することは難しく、何をどこまで学ばせるのか、教育内容を更に絞ることが課題となる。そこで、どのような能力の育成を期待するかという教育目標を具体化し、その構造を整理することが必要である。鎌田は「学習内容の性質に応じた分類としては、その単元の本質的で必須な内容に対応した『中核目標』、中核目標を支える下位レベルの基礎的内容となる『基礎目標』、その単元の学習の前提となる内容に対応する『前提目標』、そして、前提目標・基礎目標・中核目標をマスターし、さらにそれらを用いて学習を深化・発展させていく際の『発展目標』が含まれる」と述べた(2001)。例えば、皮下注射の技術を教授するとすれば、前提となるのは既習の知識としての皮膚の解剖、無菌操作、薬剤の作用および副作用などである。そして、基礎となるのは注射技術、注射器および注射針の特徴であり、中核には皮下注射の準備から実施の方法が含まれる。これをより発展させるには、痛みの少ない注射法や神経損傷などのアクセシビリティへの対処法などが考えられる。このように段階的に進むカリキュラムの進捗を加味し、前提となる内容を想起させながら基礎目標、中核目標を達成できるように教授内容を絞り込み、学習や体験が進むにつれて発展的内容へ深めていけるようにすることが必要となる。これらは複数の科目における学習内容の積み重ねによって実現するものであり、こうした考え方を教員間で共有して統一的に教育内容を整理すれば、教授する事柄の重複や欠落も防ぐことになり、教育評価もクリアになる。

また、学生の自己学習能力を育てるには、看護の場の状況を考慮し、患者に提供できる看護実践を創造する教育がなされるとよい。香川らは「固定的な知識を『教える授業』から、学生がより自由に物品に触れ、学生や教員とのアンサンブルの中で、看護をより楽しみながら看護師や患者を演じ、自ら技術を創造的に考え出していく『パフォーマンス』学習への転換」を提案している(2015)。看護の場における創造的な思考は、

より質の高い看護を生み出す。看護のための creation の力を育てるためには、創造的思考が当たり前と考える価値観、それを自らしようとする意欲、創造的思考の成功体験、これらが必要となる。

つまり、学部学生が看護に興味を抱き、看護の対象となる人たちの健康状態や生活、思いを想像し、対象者のために自分に何ができるかを創造的に考え、その過程を周囲の者(同級生、教員、臨地実習指導者、対象者)と共有するとき、更なる学習が発動する。それを刺激できるような教育を目指したい。

III. 大学院における看護学教育の課題と期待

看護の学問体系化のためには、学部教育だけでなく、大学院教育も今後益々発展させなければならない。看護系大学院の場合、スペシャリスト育成と研究者育成の2つの道がある。現場での専門性をより発揮するスペシャリスト育成の重要性はさることながら、看護学の発展を支える優れた研究者の育成をより一層充実させることが求められる。このような状況の中、本学も平成28年度より医学系研究科看護学専攻に博士後期課程を開設した。博士前期課程において研究の基礎を学び、後期課程でより自立的、継続的な研究姿勢を身につけることとなる。それに加え、研究者としてスキルアップするために、海外ジャーナルへの論文投稿および国際学会参加を経験することが重要である。しかし、英語による研究論文作成・発表・討論が壁となり、躊躇する人が多い。

平成20年度に採択された東京医科歯科大学の大学院教育改革支援プログラムの成果として、「看護系国際学会におけるプレゼンテーション技法」「大学院生のための英語コミュニケーションスキル」を作成している(2010)。これは、現在の看護系大学院教育において必要性が認められながらも十分ではなかった内容を強化するものである。世界の共通言語である英語による論文執筆および学会発表を積極的に言い、日本の看護学を世界に向けて発信していくこと、海外の動向に敏感となり世界の研究者と看護を論じる力をつけていくことが日本の若手研究者に課せられている。余は「チームサイエンス(各研究者が独自の研究を推し進めながら、かつ学際的チームでお互いに刺激し合い、共同しながら研究を進めていくこと)に国際レベルで取り組んでいくことが、今後の看護研究には必要」であり、「英語で論文を書き、投稿することは、相手の言っていることを理解し、自分の言いたいことを効果的に伝えることを進める必須の努力」であると述べている(2016)。大学院教育では、カリキュラムや教授方法に

英語力を活用する内容を盛り込み、学生に海外の研究者との交流、国際共同研究などを経験させることが重要である。また、これらの取り組みを指導教員個々の努力に頼ることなく、教育課程全体の組織的な教育目的に据え、指導側のファカルティ・デベロップメントの充実も推進すべきであると考えられる。

今後の看護学の発展と日本の看護学教育のさらなる質の向上を期待したい。

引用文献

- フロレンス・ナイチンゲール (1859) / 小林章夫, 竹内喜 (1998): 看護覚え書, うぶすな書院, 東京.
- ヴァージニア・ヘンダーソン (1960) / 湯楨ます, 小玉香津子 (2006): 看護の基本となるもの, 日本看護協会出版会, 東京.
- 田島桂子 (2002): 看護実践能力育成に向けた教育の基礎 (第1版), 32, 医学書院, 東京.
- 田島桂子 (1989): 看護教育ブックス 看護教育評価の基礎と実際, 83, 医学書院, 東京.
- 鎌田美智子 (2001): [教育の達成度がわかる・教育効果を高める 評価の視点と方法] 看護教育に活用する教育評価の考え方と方法, ナースエデュケーション, 2(4), 9-16.
- 香川秀太, 澁谷幸, 鈴木ひとみ (2015): 第6章 看護教育と臨床実践をつなぐ知識創造コミュニティー看護エデュア研究会の取り組み, 香川秀太, 青山征彦, 越境する対話と学び—異質な人・組織・コミュニティをつなぐ, 137-158, 新曜社, 東京.
- 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科総合保健看護学専攻 (2010): English Communication Skills for Graduate Students of Nursing (DVD).
- 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科総合保健看護学専攻 (2010): English Presentation Skills for Graduate Students of Nursing —看護系国際学会におけるプレゼンテーション技法— (DVD).
- 余善愛 (2016): 英語論文を書くということ (8) 日米の看護のはざままで: 英語論文を書くことの意味, 看護研究, 49(7), 618-623.

